トンボ

第八号

文治堂書店

北川太一 ひとほんほか
いのち ふしぎ

四六判 一七〇頁
定価一、五〇〇円

光太郎への思慕と敬愛により知った伊藤信吉・草野心平。出版により知己を得た品川力・渡辺文治。仏教文化に志を共有した三宅太玄・加茂行昭。昭和十九年、出征前の師や学友への追悼文他、著者が選んだ五十編、初の随想集。

光太郎伝試稿
ヒュウザン会前後

四六判 二三〇頁
定価一、八〇〇円

明治が大正に変わる一九一二年、光太郎は斎藤与里の熱意を受け岸田劉生、木村荘八等とともにヒュウザン会を興す。北山清太郎の支援・協力により催された展覧会は「公」に対するアンデパンダンであった。著者のライフワーク、試稿シリーズのⅢとなる。

神西清評論集 上下巻

上巻 外国文学 七〇〇〇円
下巻 日本文学 六〇〇〇円

三島由紀夫が師と仰いだ神西清（一九〇三―五七）、露・仏語に堪能で、堀辰雄とともに流麗な筆致をもって新文学の移植に務めた。

和巻耿介
評伝 新居格

B6判 一五〇頁
一、三〇〇円

大正年代からアナーキズムを基調とした文明批判を展開してジャーナリズムに活躍、大宅壮一の先駆となった。戦後は第一回公選の杉並区長となり話題を振りまいた。

野沢一（はじめ）
詩集 木葉（こっぱ）童子詩経

新書判 二七〇頁
九八〇円

山梨県蛾ヶ岳四尾連湖畔の掘立小屋に、戦前六年間山籠りした若き詩人の人間賛歌。光太郎あての手紙十九通を収める。高村光太郎・序。題字・草野心平。

ふるさと文学散歩
二本松と智恵子

文・勝畑耕一 画・のぞゑのぶひさ

三二頁
三〇〇円

曖昧をゆるさず妥協を卑しんだ高村智恵子、その五十二年の生涯を細密な画と文で綴る。

文治堂書店
杉並区井草2－24－15
E-mail：bunchi@pop06.odn.ne.jp
URL：http://www.bunchi.net/

目　　次

巻頭言　『陸軍看護婦』を読んで	日野原重明 佐 藤 愛 子	2
詩　親父が死んだその夜は　他	曽我　貢誠	4
評伝　仙酔余滴Ⅶ「漱石と仙酔」	吉 田 邦 郎	10
詩　鎌倉日和・歩く本	服部　　剛	18
死と詩―イギリスからの便り	熊野　友嗣	21
詩　風の惑星・最後の質問	市川　恵子	24
詩　蕁麻疹	近藤　　頌	30
詩　ひとり母語・々（イラストも）	マエキクリコ	32
連翹忌通信　Ⅳ	小山　弘明	38
詩　約束	葉山　美玖	41
詩　田舎道・浜辺	宮田　直哉	44
詩　心を宿した宇宙・他	北川　光彦	46
M・L・カシュニッツ訳詩集（2）	勝畑　耕一	52
詩 歌 三 評　阿武千代　著　陸軍看護婦	前木・服部・市川・近藤・曽我	54
トンボの輪　同人消息	市川・近藤・北川・勝畑	66
読者の輪・短信		71
編集後記	桶屋風太郎	72

題　字　中島敏枝　　編集協力　永田眞一郎

巻頭言

今般ご著書「陸軍看護婦」を送って戴き、大きな感動を覚えました。私の関係している「日本看護協会出版会」では四種類の看護雑誌を発行しておりますが、その書評欄に取り上げさせ、私の推選の言葉を贈ります。

日野原重明（医師）

２０１０年、「看護」「ＩＮＲ」（インターナショナルナースレビュー）「ナーシィング・トゥデイ」「コミュニティケア」などが刊行され「コミュニティケア」に掲載された。

ありがとうございました。「陸軍看護婦」よい本が出来ましたね。戦争の記憶が日本人から遠去かっていく当今、いつまでも遺ってほしい本です。同年代の私が東京大空襲で逃げまどっていたころ、二十歳のあなたは立派なお仕事をなさっていました。当時を偲ばせる写真の数々にも胸が迫ります。

それから帰国後に身につけられた特技、植物の生け花（ドライフラワー）の写真集にはとても感動しました。素晴らしい感性ですね。

「陸軍看護婦」の体験からこの作品の誕生までを思うと、全く豊田千代子（阿武千代）という人物の一生は、無駄のないスゴイものだと感嘆せずにいられません。

佐藤愛子（作家）

親父が死んだその夜は

曽我貢誠

親父が死んだその夜は
銀河が流れる　星祭り
あなたに空似の　満月が
澄ましてこちらを覗いてる

親父が死んだその夜は
カミナリ今は　懐かしい
建てた自慢の　鯉のぼり
今でも　大空泳いでる

親父が死んだその夜は
南の島に　舞い戻る
ヘビとトカゲと　戦友と

辿り着かない　迷い道

親父が死んだその夜は
花も名誉も　いらないよ
まあそこそこの　人生よ
あの日の呟き　思い出す

親父が死んだその夜は
微笑む顔が　遠ざかる
枝豆つまみに　三杯目
酔いが寂しさ　連れてくる

親父が死んだその夜は
街も世界も　変わらない
いつものように　夜が明けて
いつものように　風が吹く

※南の島：父が従軍したニューギニア西部地方。

母が演じた戴帽式（たいぼうしき）

戴帽式、晴れて看護師になる日
春のある日、初めて私は知った

この日、ようやく母は家に帰ってきた
遺影の前に、穏やかに横たわっている
嗚咽や涙はみられない　静かな帰宅だ
親族や近所の者たちが慌ただしく動く
と、隅に見知らぬ若い女が座っていた
しきりに、ハンカチを目に当てている

「あの人は誰ですか」
「見習いの看護師さんらしいですよ」
聞けば、昨年の夏から週二回の研修で

母に献身的な看病をしていたらしい
「どうもありがとう」と声を掛ける
「こちらこそありがとうの気持ちです
お母さまから優しさをいただきました」
目を赤くしながら、また下を向いた

今日が戴帽式だったという
婦長さんの許可をもらい
式が終わって、ここに駆け付けたのだ
まさか、戴帽して初めてのお務めが
患者さんとのお別れだったとはー

看護師は、病気を治すだけではない
患者さんに寄り添うことも大事

遺影の前で彼女は静かに手を合わせた
そのとき母が、微笑んだように思えた
帰る頃には、すっかり元気になっていた

「私、がんばります」
弾んだ声を残して、彼女は帰っていった

一つの切ない涙を乗り越えて
今日から看護師としての一歩が始まる

まぁーま

―この時から詩が生まれた―

おぎゃー　おぎゃー

やがて、ある日
―まぁーま
（お腹空いたよ　おっぱいだよ）

—まぁーま
（うんち出たよ　気持ち悪いよ）
—まぁーま
（疲れた、眠いよ　機嫌悪いよ）

まぁーまは、まんまを与える
まぁーまは、お尻を拭き取る
まぁーまは、胸に抱き留める

まぁーま
世界中の赤ちゃんが
初めて口にする不思議な言葉

まぁーま
母と子の心を結ぶ魔法の言葉

仙酔余滴 Ⅶ
漱石と仙酔

吉田邦郎

1 話の発端

平成二八年（２０１６）は夏目漱石没後百年であり、朝日新聞は四月一日から『吾輩は猫である』に解説を付し、毎日掲載していた。そんな折に突然わが家に文治堂さんから電話が掛ってきた。「吉田さん、昨日の『吾輩は猫である』の解説に仙酔が載っていますよ」との知らせである。驚いた私は前日の紙面を開いた。なるほど、そこには主人公の苦沙弥先生が「エピクテタスの本を叩き付けるように机上に放り出す」場面が記載されており、解説にはエピクテタスの著者は斎木仙酔である旨、哲学事典からの短い引用文が掲載されていた。

2「賢哲…エピクテート』

確かに、仙酔は明治三六年に東華堂書店から『賢哲―エピクテート』という小冊子を出版しており、その翌年に高浜虚子の勧めで漱石の『猫』が発表されている。筆者も祖父である仙酔に関して『忘れられた宗教哲学者斎木仙酔』（２０１３年）でこの小冊子について触れている。横文字では Epictetus（AD55～135）と綴るストア学派の哲学者について、明治時代に複数の訳本が出ていた

とは考え難い。間違いなく苦沙弥先生（漱石本人）の読んでいたのは仙酔の『エピクテート』であろう。

漱石は明治改元の一年前に、一方の仙酔は明治一三年に生まれ、二人には一三歳もの差がある。また『本郷教会百年史』記載の『新人』（教会の広報誌）の執筆者や明道会で講演した講師陣に漱石の名は含まれていない。この二つから筆者は二人の間には何の関係もないと思っていた。そこで冒頭の記事を知って手元にある『エピクテート』と、新たに購入した岩波文庫の『吾輩は猫である』の二冊から両者にさらなる関係がないかを調べはじめた。以下はその結末である。

まず『エピクテート』であるが、同書は明治三六年、仙酔二二歳の時に刊行され、一方、『猫』は明治三七年に文章会「山会」で、更に翌年から本格的に『ホトトギス』に掲載されたほぼ同時期の作品で執筆時に漱石は千駄木の根津神社の近くに住んでおり、仙酔が出入りしていた本郷教会も近くにあり、その意味でも本が誰かから漱石に手渡された、という以上に何か関係ありそうである。

改めて文庫本の大きさで１７２頁の『エピクテート』を見ると、装丁からして奇妙な本である。表紙の右には「幸福主、義泰斗　エピクテート遺篇」と並んで「日本斎木仙酔訳」とあり、中央には大きく赤字で『賢哲……エピクテート』とある。「遺篇」としたのは、彼は文盲で、残したのは伝聞の言葉のみの故であろうが、本のどこを開いても原書が何語から翻訳したかも書いていない。仙酔は本郷教会でギリシャ哲学を講じていたが、まさかギリシャ語ではあるまい。出版の一年前に仙酔は東京外語の一期生として独文科を卒業しており、ラテン語の可能性はある。冒頭の彼自身の序文は何と二三頁にもわたる。その自序の出だしは

「理性は人にとりて云えば、あらゆる実在と、あらゆる活動の　法なり。然れば福音家ヨハネは『太初に道あり、道は神と偕に在り、道は　即ち神なり』と書き始めたり、而して其の所謂、道、即ちロゴスは理性に外ならざるなり」

ざっとこんな調子で最後はエピクテートを詠じた四連の詩で終わっている。その冒頭のみを掲げる。

光り小暗らき　　牢獄（ひとや）なる
鐵の鎖に　　繋がるゝも
「我」は自由の　　人なりと
叫び得たりな　　エピクテート

本文は二編からなり、いずれもエピクテートの説いた人生の教えを載せてあるが、晦渋のため引用は割愛する。苦沙弥先生こと漱石が放り投げたのも無理からぬことである。

3『猫』の中のエピクテタス

次に筆者は、二章以外にエピクテタスの言及がないか『猫』全ページを走査し、ほかにも三か所あるのを見つけた。ちなみに新聞の引用文は明治三八年元旦に、苦沙弥が水島寒月と外出し、翌日にいらついて書斎に入った場面である。

「主人はエピクテタスとかいう人の本を披いて見ておった。もしそれが平常の通りわかるなら、ちょとえらい所がある。五、六分もするとその本を叩き付けるように机の上に抛り出す」（二章）

すぐ後には、猫の感想で「哲人の遺書に一道の慰安を求めつつあるのか、ちっとも分からない」と続く。

二番目は数日後、美学者の迷亭と寒月の二人が来て延々と馬鹿話をし、それに負けじと苦沙弥も愚にもつかない話をしたことへの猫の感想である。

「負けぬ気になって愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだろう。エピクテタスにそんな事をしろと書いてあるのかしらん。」（二章）

三番目は迷亭が苦沙弥邸に居る時に実業家夫人金田が来て娘の婿候補として理学士・寒月の人柄や博士なれるかなどと聞く。亭主の肩書きや金持ちであることをひけらかす、苦沙弥や迷亭らが最も嫌悪するタイプの女で、二人と嫌みの言い合いをする場面だ。

「吾輩は猫だけど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつける位な学者の家に寄寓する猫で、世間一般の痴猫、愚猫とは少し撰を殊にしている。」（三章）

最後は、胃弱で世間の無理解に腹を立てる苦沙弥が哲学者とおぼしき人物に諭された後、書斎に入り何か考えだし、鏡で己の痘痕面を眺める場面で、猫の感想は左のごとくである。

「この意味で主人が鏡をひねくっているなら大分話せる男だ。エピクテタスなどを鵜呑みにして学者ぶるよりも遥かにましだと思う。」（九章）

実際の漱石も疱瘡で、あばた面だった。

4『猫』の中の仙酔探し

『猫』には、モデルが判っている人物がいる。第一に苦沙弥先生は漱石自身だし、水島寒月が漱石の熊本時代の教え子の寺田寅彦であることはよく知られている。また小説には内外の多くの有名人が実名で登場してくる。

エピクテタスが出てくる場面を確認後、筆者は仙酔の影を求め改めて『猫』を精読した。物語が始まって、すぐ友人で美学者の迷亭が登場する。最初は彼に当たりを付けたが、太平楽とほら吹きの性格で、すぐ仙酔とは関係ない人物と判断した。あと長々と続く馬鹿話を辛抱して読んだが、八章までエピクテタス以外、仙酔の影らしきものは見当たらなかった。

ところが八章に入ると、臥竜窟と称する苦沙弥邸で大事件があった後、迷亭、寒月らの常連客と異なる三人の訪問客が次々と現れる。一人目は学生時代の友人で、今では実業家金田にゴマを擦っている鈴木藤十郎、二人目は主治医の甘木、三人目が前述した「哲学者とおぼしき人物」である。大事件とは苦沙弥邸の近くに落雲館という私立中学があり、野球の球が垣根を超えてしばしば臥竜窟に飛び込み無断で庭に入る生徒・学校と苦沙弥との間に起こったトラブルである。まずは猫の語る三人目の訪問客のプロフィールを紹介する。

「珍客が来た。（中略）何という名前かしらん。ただ顔の長い上に、山羊のような髯を生やしている四十前後の男といえばよかろう。

迷亭の美学者たるに対して、吾輩はこの男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学者というと、何も迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見していると如何にも哲学者らしく思われるからである。これも昔の同窓と見え云々（後略）」

筆者は、おやおや哲学者が出てきた。哲学者で山羊髯を生やしている…仙酔と似ているが面長で四十がらみじゃあ仙酔とは違う、と思いながら読み進むと、友人への批評や俗世間への処し方を諄々と苦沙弥へ説く場面が続く。会話の中には「君は何だい」「始終泰然として羨ましい」という苦沙弥に対し「自分は『泥に埋まっている自然薯（じねんじょ）みたい』なもので、貧しくても喰えれば充分で泰然として『人を羨まない、心の自由が肝要』」という趣旨のことを語り。さらには鎌倉建長寺や円覚寺に縁の深い無学禅師の偈「電光影裏に春風を斬る」などという言葉が飛び出してくる。その姿勢などは筆者の知る仙酔そっくりだと感じた。例えば、迷亭については「天稟の奇人だが考えも何もない」、鈴木ついては「理屈はわからんが世間的には利巧な男」などと批評している。

さらに九章まで読み進んだ時、筆者は思わず「あっ！」と声をあげた。苦沙弥が「『東洋流の学問は消極的で大に味（あじわい）がある。心そのものの修行をするのだから』と先達

幸福主義泰斗エピクテート遺篇

日本齋木仙醉譯

賢哲エピクテート

東京　東華堂發兌

青年士女よ此廣告を見落す勿れ

ひ生活の幸を俱にして　世の興へにし怡樂をば　徐ろに念ひ忍ばしめ　其の晩年を夕照の　光の中に榮あらず　猶ほ家妻の手を執らん　噫其の人は幸なれや　妻の手により瞑すなる　斯からん人の臨終なる　眼に浮ぶ涙には　幽しき虹や閃めかん

と、以て其の一斑を悟るべし、誠に此書は婦德脩養者必讀の書たり女學生の文を作る者の好參考書たり、家庭の珍品たるは謂ふ迄もなく、詩人は此の中に慰安の盃を飲むを得べく、求道者は此の中に愛の哲學を聽く事を得、今茲に本書に對する批評の一例を掲げん

▲新人評　「文明主義」の著者齋木仙醉君の譯にかゝる原著者は獨逸プランツボナイセン夫人と愛情に關する泰西名家の金言秀句を蒐めたるものなり。鶯を分つこと三。婦人美觀。戀愛美觀。婚姻美觀。殆んど凡て女性の美を缺ぶ。現實の下等なる觀察以外。閑住の讀者に對し高潔なる理想と情の福音とを鼓吹するに與つて必ず力あらむ

發兌所　東京神田區裏神保町五番地　東華堂

賣捌　東京堂　岡崎屋　文明堂　大阪前川

第二篇

賢哲エピクテトー終

賢哲エピクテート奥附
（定價貳拾貳錢）
明治卅六年五月十三日印刷
明治卅六年五月十六日發行
譯者　齋木延次郎
發行者　三好直藏　東京市神田區裏神保町五番地
印刷者　三島宇一郎　東京市神田區表神保町二番地
印刷所　弘文堂　同所（電話本局二三一六番）
發兌所　東京市神田區裏神保町五番地　東華堂書店
大賣捌　東京堂・岡崎屋・上田屋・有斐閣・文明堂・大阪前川・吉岡・福音社・名古屋川瀨代助

不許複製

て哲学者から承わった通りを自説のように述べ立て」たのに対し、迷亭の「えらい事になって来たぜ。何だか八木独仙君のような事をいってるね」という反応があり、さらに「八木独仙という名を聞いて主人ははっと驚き、議論は八木独仙君の受け売り」であるという猫の描写が続く。（九章）

5「哲学者斎木仙酔」と「哲学者八木独仙」

偶然とは思えないよく似た名前を知って、筆者は「独仙のモデルは仙酔である」ことに確信を抱いた。山羊のようなあご髯を生やしている点も仙酔に酷似している。しかし小説にある「四十歳前後で面長」な点や苦沙弥の「昔の同窓であるらしい」点など、独仙の風貌や年齢は仙酔とかけ離れている。『エピクテート』や『猫』の発刊当時、仙酔の実年齢は二〇歳半ばであり、顔も丸顔で山羊顔の独仙とは似ていない。これら仙酔と独仙との相違を筆者は次のように判断した。

風貌であるが、若年の仙酔は当時から老成していた。拙著には弓町本郷教会でギリシャ哲学を講ずる仙酔と実際に出会った山下清の随筆を引用してあるが、その中で氏は仙酔を「赤ら顔のデップリ肥えた三十をすぎたと思うが頬髯を生やした人」と表現している。

彼の当時の文章も、とても二十代前半の若者の筆によるものとは思えない。一方、当時時流に乗っていた本郷教会の機関誌『新人』を近所の漱石も読んでいたと思われるし、「一世を風靡する社会指導機関の感があった明道会」（『本郷教会五十年史』の野口末彦の話）にも時たま顔を出していたことも充分に考えられる。

以上述べた点や仙酔の師、本郷教会の海老名弾正牧師の風貌が八木独仙にそっくりである点を勘案すると、漱石は「弾正と仙酔の二人から八木独仙のキャラクターを作りあげた」のではないだろうか。独仙を「昔の友人らしい」としたことも、老成した仙酔の風貌から漱石が作り上げたのかもしれない。

八木独仙は十章、十一章にも登場する。十章では雪江という苦沙弥の姪で淑徳女学校に通っている十七、八歳で紫の袴を履いた女学生が来訪し、独仙が彼女の学校で淑徳婦人会に招待され演説したことを語り、「あんな長い顔で（中略）天神様のような髯を生やしている」ので感心して聞いた旨の会話がでてくる。また十一章では迷亭と独仙が、会話を交わしながら碁を打つ場面にも現れる。

淑徳婦人会で恐らく女性の修養を説いた独仙は、基督教婦人矯風会で女性の生き方を説いた仙酔を連想させ、また迷亭と碁を打ちながらの独仙の会話も仙酔を彷彿とさせる。

最後に山口花南による仙酔の風貌を少し長いが載せておく。

『吉備の産に一奇骨あり、紅顔にして美髯、一見人をして竹林の清客を懐はしむ。夙に仏教三寶の功徳を悟れども終に其の奴とならず、儒門を叩きて蛍雪の苦を忍びしが終に孔孟の精神に飽くこと能わず、基教両典の真理に造詣する所深しと聞けども終に又之に酔はず。よく三教の上に超絶し得て茲に世界真宗設定の発願を為し新福音を伝ふるの大願を立てたりといふ。自ら仙酔道人と称し頻りに法を説くに世間と出世間とを嫌わず又た男女老幼貴賤の別を立てず、真に当代の一奇物なり。』

6 漱石と仙酔

言うまでもなく、知名度において漱石と仙酔は「月とすっぽん」である。しかし漱石が小説家として活躍したのは明治の終りから大正初期にかけての十年余りで意外と短く、その期間は仙酔の活躍した期間とほぼ重複している。それを裏付けるように、明治四十年、日高有倫堂目録に仙酔の『破天人論』の広告と並んで小松武治訳、文科大学講師夏目先生・上田先生校閲とあるチャールス・ラムの『シェイクスピア物語』の広告を見つけた。上田先生とは漱石と同時期に東大の講師となった上田敏である。上田敏の名も『猫』の迷亭と越智東風との会話に出てくる。

『破天人論』の著者名は匿名隠士となっているが、この本は明治三六年、仙酔が書いて、萬朝報の黒岩涙香の『天神論』に対する批判の書である。本稿と直接関係ないのでこれ以上触れない。この図書目録には同じく『猫』に登場する大町桂月の本も七冊紹介されている。

さらに先程、筆者が触れた海老名弾正の著書は『基督教本義』、『人道』、『宗教々育観』の三冊、仙酔の本は、『破天人論』のほか『三位一体論』、『トルストイ教訓小説集』、『接神術』の四冊が紹介されている。更には綱島梁川の『梁川文集』の広告が見受けられる。梁川は仙酔が尊敬した本郷教会の先輩であり、実は『猫』にも梁川や藤村操がモデルと思われる架空の人物が、苦沙弥や迷亭の会話の中に出てくるが、漱石が本郷教会の存在を知っており、『エピクテート』を読んで『猫』に八木独仙を登場させたことはまず間違いない。そしてそこに海老名弾正と仙酔の人柄や思想を丁寧に投影させている。さて筆者の命が続けば、漱石の宗教観などについても後日論じたい。

（以下続く）

鎌倉日和

服部　剛

晴れた日の鎌倉は
緑の木々の間に立つ
お墓さえ
明るく見える

あの日、体を脱いだ君は
いつから
若葉をそよぐ
風になったろうか

何処かで鳥が鳴いている

それは円い空から

鎌倉の道を往く者への
小さな合図

——あなたに宿る
方位磁針の指すほうへ

歩く本

私が今、ここに立っているのは
素朴な一つの謎であり

今日の場面を、静かにみつめ
掌にのる
小さな巻物を開いて
設問を解き明かしながら

歩きたい

重力に支配されるこの世界で
私は、私の、ステップを探す

教科書は何処にも無い

私自らをひとりの本として
歩けば
道の向こうから
歩いてくる
不思議な本のあなたと
出逢う

死と詩―イギリスからの便り

熊野友嗣

今年、私の祖父が他界した。数えで九十九歳の白寿。深夜の就寝中に息を引き取っていたということなので、天命を全うしたのだと思いたい。

葬儀が終わり、一段落着いたところで、私はイギリスの友人に祖父の死を知らせた。当誌6号に寄稿した『ケントの思い出』に登場する、古希を過ぎた友人だ。

彼とはお互いの家族のことについても親しく話をしている。彼は丁寧なお悔みに添えて、一編の英詩を贈ってくれた。それを訳出してみたのが次頁の詩だ。

作者のヘンリー・スコット＝ホランド（1847～1918）は、司祭にしてオックスフォード大学の神学欽定教授を務めた人物。イギリスでは弔事に寄せる献辞として広く知られた詩なのだそうだ。あくまで死を森羅万象のプロセスの一部と捉え、死者とそうでない者とは隣り合わせに在るという考え方は、日本で曲を付けられてヒットした『千の風になって』にも似ている。こちらはアメリカの主婦が作者とされ、その最後は「私は死ぬのではないのです」と括られている。

我らが『トンボ』同人にも、死をこの世にありふれた出来事のひとつとして描き出そうと試みられた方がいる。第五号に『わたしの死んだその朝は』を発表された高橋晃国さんだ。その詩の前半で読者のスクリーンに映し出されるのは、いつも変わらない朝の光景。それが自身の死んだ日だとしても。高橋さんは、死を「日常」から別の「日常」への移行と表現する。「非日常」は、家族にとっても点ともいえるわずかな時間に過ぎない。やがて訪れる死を、極めて冷静に予見した詩だ。

ところで、後掲のスコット＝ホランドの詩には本来タイトルも連もない。というのも、そもそもこの文章はイギリス国王エドワード七世の崩御に際して、ロンドンの聖パウロ大聖堂律修司祭として寄せた説教のほんの一部分を抜粋したものなのだそうだ。

そこで彼が試みたのは、死に対して人々が抱く漠然とした恐れと、永遠なるものへの希望とを結びつけ、神の御前に敬虔であるべき所以を説くことだった。「詩」として人口に膾炙しているのは、その後者の表れとして、愛する人の安らかな死に顔が、遺された者に語りかけるメッセージとされる一節に過ぎない。

人類の祖先が亡骸を埋葬するようになって以来、人は他人の、そして自らの死を、さまざまな形で理性や信仰のな

かに位置づけてきた。恐れと希望という、死を前に湧き上がる二つの相反する感情は、どちらも受容のプロセスにおいて看過することのできない存在ということなのだろう。

※

死なんて大したことではありません
そっと隣の部屋へ移っただけ

何も起こってはいないのです
すべてしっかり、そのまま残っています

私は私であり、あなたはあなたであり、
あれほど近しく過ごした思い出の日々は、
傷つくことも、変わることもありません
私たちの間にあった何もかもは、
私たちのものであり続けるのです

私を呼ぶときは、いつもの言い慣れた名前で
私の話をするときは、おきまりのうちとけた
調子で　口調もあらためたりしないで

悲しいとか粛(つつ)しまなくちゃとか、
そんな空気に飲みこまれないで

おたがい他愛もない冗談で
いつも笑っていたように、笑ってください
日々を楽しんで、笑顔でいて、
私を思い、私のために祈ってください

今までそうだったように、
私の名前がこれからも身近なもので
あってほしい
口にするとき億劫になったり、
闇(くら)い影を感じたりしないでほしい

人生の意義は少しも揺らぎません

今までも、これからも
それは永久不変の営みなのです

私の死なんて、なんと取るに足らない
出来事でしょう
なぜ忘れられていくというのです？
私が見えなくなったから？
でも私はあなたを待っています、わずかな間だけ
どこか、とても近いところ、
そこの角を曲がったあたりで

すべてあるがままに
何も傷ついてはいません、何も失ってはいません
ほんのちょっと辛抱すれば、すべて元どおり
また会うときには、離ればなれの哀しさを、
一緒に笑い合うことにしましょう

写真集 金子兜太

埼玉県皆野町で少年時代を過ごした金子兜太さん。親交のあった長瀞町の野口正士さんが追悼写真集を出版しました。

古里の秩父で地元の人たちと交流する生前の姿や、全国に残された句碑や新聞記事など210枚を収録。A4版、120頁。2500円（税送料込み。）

問い合わせは野口さんへ、

〒369-1340
秩父郡長瀞町大字本野上497の2
TEL･FAX（0494-66-1232）

黒の惑星

市川恵子

真夏の照りつく
海辺のバーベキュー場に
ひとりの幼児が座っていた

わたしは腰をかがめて
おなまえは？
と尋ねる

そうた

何歳ですか？

・・・・・・・・・・

二歳半です。
彼の父親が答えた

彼の眸は黒黒と輝き
みずみずしさを
たっぷりと湛えている

眸に白々しさの上回った
わたしには
そうた君の眺める景色は
もう　映らない

漆黒とは
その上にどんな色を重ねても
くすむことがない
黒はそれほどに逞しく
穢れを跳ねのける

神秘な色だ

颱風が通り過ぎた太平洋の片隅には
天上から降り注ぐ
魂の破片たちが眩しく揺れている

四頭身にも満たない
小さな体にひそむ
眼差しは
大海原をまっすぐに見据えている

そして同時に　わたしたちを
常に試しつづけている

みにくいものの正体を
うつくしいものの真実を
ありのままに映し出す　その
黒い惑星で

最後の質問

一日の終わり　眠りにつく前
瞼をじっと閉じる
沈黙に静かに耳を澄まして
あなたは　あなたの内にいる
もう一人の自分へ声をかける

温かいひとがもうすぐ迎えにくるよ
きょうも一日よくがんばったね
苦しい、という言葉を
まだ知らない
五歳のあなたに

窓の外に広がる景色が全てではない
あなたの内には、必ず

「うつくしい」世界があるんだよ、と
十四歳のあなたに

堀割の乳白色の川
いま、羽ばたいていった水鳥は
足踏みをしている
あなた自身なのだよ、と
二十九歳のあなたに

きょう世界へ向けて
「ありがとう」の言葉を
何度、口にしましたか
言葉の力を他者へ伝えられていますか
大切なものを見失いつつある
四十二歳のあなたに

今まで何度、命を救われましたか
今いちばんやりたいことはできていますか

夕焼けの色をしばし眺めることを忘れた
六十歳のあなたに

そして　想像する
一本の樹に還るときを

そのとき
あなたの内に棲む
もう一人のあなたへ
最後の質問をしてみたい

あなたの人生は
どんなに美しく
幸福でしたか？
と

＊長田弘さんの『最初の質問』より着想を得ました

蕁麻疹（じんましん）

近藤　頌

人　　とし　　て
人と　　し　　て
人とし　　て　　人と
して人として　人と
して人　と　して　人として人
として人として人と　　人　と　　して
人として人　として　　人として人とし　て人と　し　て
人として　人として人として人として人　とし
人　と　し　て人　として　人として
人として　人として　人として人とし
て　人　とし　て人　と　し　て　人　として人と
して人として　人として　人として
人と　して　人と　して

人として　て人として人として人として人と　して人として
人として人として　て人　として人として人として　て　人として
て人　として人と　して人として　人として　て
人として　て人として　人として人として人として人として
人として　て人として　て人として　人　として
人として　人　として　人として人として　て人
と　して　人として　て人として人として人
として　人として人として　人　として
人として　て人として　人として人と
して人　として　て人　として人として　人として
て人として人　として人として人　として人
人としてて人　として　人として人として
人　と　して　人として　て人　と　し　て
人と　して
人として　て
人として

mother tongue island

maeki Kuriko

at age fifteen, i left Japan
and a long-long distance relationship
with my own mother tongue thus began.
no email or internet back then
just reading books at hand,
writing letters and diaries.

Re-re-re-re-rereading
“Kokoro” and
“Roshia ni Okeru Nitarinofu no Benza ni Tsuite”
for i had no other books around.
i smuggled books at every re-entry, but
proper phonetic readings for *kanji*
could never fit in my luggage abroad.

since my return to Japan at forty,
my auto-invented *kanji* readings
amused native Japanese speakers.

「弔辞」
「画期的」
「閑話休題」

ひとり母語

マエキ　クリコ

十五で私は日本を離れ、
母語と遠距離交際してた。
メールもネットもなかった頃から、
手持ちの本や手紙を読んで
日記や手紙をひたすら書いた。

「こころ」と
「ロシアにおけるニタリノフの便座について」
それしかないから何度も読んだ。
帰国するたび本は増えても、
漢字の読み方、発音までは
スーツケースに詰められず。

四十で日本に戻ってからは、
浦島花子の漢字の読みで
時々人に笑われた。

「弔辞」
「画期的」
「閑話休題」

although i knew what they meant,
how to pronounce them, i was not sure.
like whatchamacallits i know by face,
they popped in my vocab randomly.
like a bell clanging as it's struck
kanji rang at my glance ad-lib.

pieces of mother tongue brought overseas
changed their sounds and voice over time,
became independent
a loner's language
a small, unique island just for me.

although i cannot pronounce them all,
i'm fond of *kanji,* and
their implicit bodies
not so fluent, yet full of imageries.
they speak to me more than the alphabet,
a mere phonetic code
recycling twenty-six letters.

意味は何となくわかっても、
読み方知らない言葉達。
顔見知りのはずなのに
名前あやふやな人のように、
語彙にぽつぽつ混じってた。
打てば響く鐘のように、
見たら漢字が勝手に鳴った。

私の道連れに海越えた
母語の欠片は響き変え、
いつの間にかに独立し
私一人の言語になって
小さな島国作ってた。

たとえ読み方わからなくとも、
姿形で意味漂わせ
口重だけれど、表情豊か
そんな漢字が私は好きだ。
二十六文字使い回して
言葉の響きを表示する
abcd 達よりも。

々

What shall I call you, little one?
Always following others
You don’t even have
your own name

A little smaller
than everyone,
yet you multiply
those you stand by

人々 (people)
花々 (flowers)
日々 (days)
其々 (individuals)

Because of you
the world is wider
Without you
they are all loners

Thank you,
the nameless one
for the world becomes
fuller and richer because of you

々

あなたをなんてよんだらいい？
いつもひとのあとについて
じぶんのなまえさえ
もたぬあなたを

みんなよりひとまわり
ちいさなからだだけど
よりそっているもじを
おおきなかずにふやす

人々
花々
日々
其々

あなたがいるから
せかいはひろがる
あなたがいないと
みなひとりぼっち

ありがとう
なもなきものよ
あなたのおかげで
せかいはふくらむのです

連翹忌通信(五)
「光太郎遺珠」その四

小山弘明

前号でも書きましたが、数年前、高村光太郎が書いた「海の思出」(昭和十七年十月十五日発行『海運報国』第二巻第十号)という随筆を新たに発見し、補遺作品集「光太郎遺珠」に掲載しました。そこには今まで知られていた光太郎作品や、『高村光太郎全集』所収の年譜に記述がない事実(と思われること)がいろいろと書かれていました。

その一つが、光太郎が明治四十年に最初の留学地ニューヨークから次なる目的地ロンドンに向け、大西洋を渡った際に乗った船が、イギリスの船会社・ホワイトスター社の「オーシャニック」と判ったことでした。

この「オーシャニック」は、明治三十二年の就航で、総排水量一七、二七二トン。光太郎が渡英した同四十年にも現役で航行していました。というより、人気客船としてその地位を不動のものにしていたと言えるでしょう。それは、スピードを犠牲にする一方、安定して快適な航海ができるような豪華客船というコンセプトの船だったためです。その点が、スピードにこだわるあまり、乗り心地や乗客の利便性を後回しにしていた他の船会社の船に辟易していた人々の心をとらえ、評判となっていたのです。

光太郎は前年の渡米の際には、総排水量三、八八二トンという料金の安い小さな貨客船「アセニアン」で、荒天続きの太平洋を横断し、予定の日数を遙かに超えて北米大陸にたどり着きました。あまりの暴風で「陸地近くなつた頃、流木が船に衝突して

食堂のボオトホオルの厚ガラスを破り、海水が一度に踊り込んで来て大騒ぎした事」（「海の思出」）があったそうで、その経験から、渡英に際しては大きな船を選んだと考えられます。

それにしても疑問に思うのは、渡米の際には「アセニアン」で経費削減を図った光太郎が、渡英の際にはなぜ豪華客船に乗ったのかということです。その答えは昭和二十九年に書かれた随筆「父との関係」にありました。曰く「父の配慮で農商務省の海外研究生になることが出来、月六十円ばかりの金がきまつてくる事になつたので、六月十九日に船に乗つて大西洋を渡り、イギリスに移つた」。

さらにはニューヨークでその夜学に通っていた美術学校アート・スチューデント・リーグで特待生に選ばれ、そこで教鞭を執り、光太郎を助手として雇ったこともある彫刻家ガットソン・ボーグラムの配慮で、七十五ドルの賞金を現金で受け取ることもできました。かくして光太郎は、豪華客船「オーシャニック」でロンドンへと渡ったのです。ただし、光太郎の部屋は二等船室でした。

その後、ホワイトスター社では、「オーシャニック」の「安定して快適な航海ができるような豪華な客船」というコンセプトをさらに発展させ、究極の豪華客船とも言える船を就航させました。それがかの「タイタニック」です。処女航海は光太郎渡英五年後の明治四十五年、光太郎が「オーシャニック」で辿ったのと逆のコース、ロンドンからニューヨークへの航路でした。しかし周知の通り、この処女航海で、「タイタニック」はカナダ東端ニューファンドランド島沖のラブラドル海で氷山に激突し、沈没してしまいました。

「タイタニック」のクルーは、エドワード・ジョン・スミス船長以下、全部で九名。その中に、「オーシャニック」のクルー経験者が四人います。マードック一等航海士、ライトラー二等航海士、ピットマン三等航海士、ムーディ六等航海士の四人です。特にライトラー二等航海士とピットマン三等航海士は、光太郎が乗船した明治四十年の時点で、「オーシャニック」に乗っていたことが判っています。

「タイタニック」といえば、平成九年公開のジェームズ・キャメロン監督・脚本によるアメリカ映画「タイタニック」。こちらにライトラー二等航海士、ピットマン三等航海士ともに実在の人物として登場しています。ピットマン三等航海士は、登場シーンもほとんど無く、セリフがありませんでしたが、ライトラー二等航海士の方は、氷山との激突後に、レオナルド・ディカプリオ扮する主人公ジャック・ドーソン、ヒロインのローズ（ケイト・ウィンスレットが演じました）ら、パニッ

クに陥った乗客を鎮めるため、持っていた拳銃で威嚇射撃を行うなど、重要な役どころとして描かれていました。ちょうど光太郎の随筆「海の思出」を見つけ、「オーシャニック」や「タイタニック」について調べていた頃、テレビのBS放送で映画「タイタニック」の放映があったため、興味深く拝見しました。

「タイタニック」は氷山との衝突による沈没という悲劇的な末路をたどりましたが、光太郎が乗った「オーシャニック」もその末路は哀れでした。大正三年、第一次大戦が勃発するや、英海軍の仮装巡洋艦に改装され、作戦行動に出たのです。ところが、大型客船に無経験な海軍士官が艦長になっていたせいか、悪天候の中、シェトランド諸島の島で座礁沈没、わずか十五年の生涯を閉じてしまったのです。諸行無常、盛者必衰の感があります。

「海の思出」、この後は明治四十一年の渡仏に関する短い記述が続きます。曰く「英仏海峡はニユウヘブン‐ヂエツプを渡つた。至極平穏な数時間で、私はその間にドオデエの「サフオ」を読み了(おは)つた。海峡の現状を新聞で読むと感慨無きを得ない」。何気なく書いてありますが、ニユウヘブン（ニューヘブン・英）‐ヂエツプ（ディエップ・仏）間の航路を使ったというのも、今まで知られていた光太郎作品や年譜には記載されていませんでした。ちなみにここには現在も航路が通っています。「海峡の現状」は、この「海の思出」が書かれた昭和十七年に、「ディエップの戦い」という連合軍のフランスへの奇襲上陸作戦による激闘があったことなどを指していると思われます。

さらに「海の思出」は、留学の末期（明治四十二年）にイタリア旅行で訪れたヴェニスのゴンドラの記述を経て、同じ年の帰国に関して記されます。結局、三年半に及び、地球をぐるりと一周した光太郎の欧米留学、北米での大陸横断鉄道乗車を除き、その行程のほとんどが船によるものでした。「海の思出」、最後は「私は海が実に好きだ。私は船に乗ると急に若くなる。」の一言で締めくくられます。『海運報国』という船舶関連の雑誌に載った文章なので、一種のリップサービスかな、と思いましたが、既知の光太郎作品にあたってみると、どうもそれだけではなさそうです。「△東京の自動車は危険で、あれに乗るには戦闘準備をしてゐないとならないので嫌い。汽車は酔ふから嫌い。汽船は動けば動くほどい、気持になつてきて、ちつとも酔はないのです。」（「〔生活を語る〕」『詩神』第2巻第6号　大正十五年）。この他にも、船旅の心地よさを綴った文章があります。

そして、「海の思い出」には、書かれていてしかるべきなのに、意図的に割愛されていると思われる内容もあります。そのあたりを次号に。

約束

葉山美玖

世界へ
まだがんじがらめのあなたを
うつくしい樹の枝のように
ほどいてゆけ

葉月に
私は生を受けた
私が胎内にいるがゆえの
悪阻の苦痛に
耐えきれず
アルコールに溺れた
母の子宮の中から

おぎゃあと
大きな声を上げて
誕生した

もしも
両親が後年よく
「産みたくなかったのよ」
「できちゃったんだよ」
「もう堕ろせなかったんだよ」
と愚痴ったように
わたしという胎児は
単に父と母の性交から
できあがったのだ
としても

一人の男の精子と
もう一人の女の卵子が
偶然にも

結合したことは
やはり
光輝く奇跡であったのだ

生まれいづることは
怨
かも知れないけれど
私は自力で泳いで
恐怖に満ちた闇の中から
外へ出た

ぎゅっと握りしめた
赤ん坊の手が
小さな葉のように
開かれる
お前はもう
なにかを乗り越えたのだ

田舎道

宮田直哉

海を見ようと言って谷を降りた。

私たちの歩く田舎道は、単線レールに沿って果てしなかった。
時おり風を連れて列車が通った。
道に散りばめられた花々の影が遠い思い出のように揺らいだ。
名ばかりの駅をすぎると波の音が彼方に聞こえだす。
気が付けばとんびが風に乗っている。

私たちはことさらゆっくりと歩いた。
こころよい田舎道がいつまでも続いてくれればいいと。
のろまになった私たちを風はただ祝福のように撫でていた。
それはいつしかやさしい波を私たちのうちに感じさせていた。

浜辺

浜辺に座ってやさしい波の音を聞いていた。
時おりの私たちのささやきは波にさらわれていった。

近くでは小さな女の子がひとり貝殻を拾っている。
お前の微笑を感じる。
私はそれに気がつかないふりをする。
そうして流されていったささやきとともに
その笑みを波間にただようままにさせていた。

午後のあたたかい光を背中に受けて
私たちは波のささめきを聞いていた。

心を宿した宇宙

北川光彦

世界の始まりは
光で満たされていた
ビックバンを経て
物質が生まれ
空間が生まれ
時間が流れはじめた

単純なものから
複雑なものへ
物質の自己再組織化が進行し
やがて生命が誕生した
生きものが増えてゆくしくみも
生きようとする意志も

坂をころがり落ちる石のように
熱力学第二法則（死神の掟）が原動力だった

そして、とうとう
捕食・保身から
宇宙を理解するとともに破壊もできる
心が生まれた

はたして、この心に生じた
自由意志なるものは、
本物か、
それとも
単なる幻想か、
そこに
世界の未来がかかっている

言葉の誕生

言葉にならない
混沌が世界を満していた

その対称性が破れる毎に
一つの言葉と
その意味のクオリアが生まれた

一つの言葉の意味は
その言葉以外の
残りのすべての言葉と混沌によって
支えられている、だから
一つの言葉は
全世界と同じ重みを持つ

「私」という発明

世界を観るために
「私」が必要だった

Cogito ergo sum
我おもう、ゆえに我（の意識）あり

私を見ている私がいる
向かい合う二枚の鏡に映る
無限の繰り返しの
答えの出ないアルゴリズムの余白の中に、
心は私という虚構（非物質の存在）
をつくりだした

しかし、
私だけを作ることはできない、

世界を観る私（主観・意識）と
私に観られる世界（客観）という
一対の相反する
矛盾する二つの概念が
同時に生まれる必要があった

私（主観）という虚構には
絶大な効果があった、

「私」の発明によって、
世界は私によって理解され、
私が私を、人が人を
繰り返し教育する
心の無限ループによって
人類の限りない進化が始まった

第28回　女川「光太郎祭」のお知らせ

高村光太郎文学碑顕彰式典を下記のように開催します。

高村光太郎は「時事新報」の依頼で紀行文「三陸廻り」執筆の旅に昭和六年八月九日に本郷駒込林町から出発した。そこで毎年八月九日を女川「光太郎祭」の開催日と決め、平成四年（1992年）にスタートした。

東日本大震災で文学碑の流出・倒壊にあったが、被災された事務局長、貝（佐々木）廣氏の言葉、「どんな時でも淡々と歩めばよい……。」その想いを抱き震災の年も急がずに休まずに女川「光太郎祭」を継続してきた。今年（令和元年）も八月九日に開催します。是非ご参加下さい。

日　　時　　2019年（令和元年）８月９日（金）午後２時～午後５時
内　　容　　＜記念講演＞　講　師
　　高村光太郎連翹忌運営委負会　代表　小山　弘明
　　＜献花式＞　６名により献花
　　＜朗　読＞　紀行文
　　＜朗　読＞　詩碑（よしきり鮫）
　　＜朗　読＞　詩碑（霧の中の決意）
　　＜朗　読＞高村光太郎の詩、10名前後予定
　　＜演　奏＞　オペラ歌手　本宮　寛子
　　ギタリスト　宮川　菊佳
場　　所　　女川町まちなか交流館　小ホール（女川駅より徒歩３分）
　　〒986-2261 宮城県牡鹿郡女川町女川浜字大原1-36
　　電話；0225-24-6677　ＦＡＸ；0225-24-6679
会　　費　　無　　料
アクセス　仙台駅➡（ＪＲ仙石線）➡石巻駅➡（ＪＲ石巻線）➡女川駅
　　（約一時間三十分。仙台駅より石巻駅まで高速バスあり）
問い合わせ　女川・光太郎の会
　　事務局　　佐々木　英子
　　〒986-2243　宮城県牡鹿郡女川町鷲神浜字内山３－１
　　NI･1街区２番地桜ヶ丘東住宅４０４
　　携帯電話　　090･6686-7811

M・L・カシュニッツ訳詩集（2）

勝畑　耕一

私と私

私の私と私
一人は姿勢正しく
なんとかしっかり見つめている
もっと両手いっぱいに、と
まだ大汗をかいている
極寒の疼痛

もう一人は壁に向かい
ずっと立ち尽くし
モルタルの道で読みふける

夢に関する小冊子を
透けて輝いている
あちこち漂う明かり

私は私に言う
髪をばっさりと切ろう
私は私に問う
誰を思って
私は私に言う
これでおしまいにしましょう
私は私に問う
どうして？

私はさかな
私は筌（うけ）
私はりんご
私はナイフ
私はとうもろこしの粒
私はめんどり

私は糸
私は針
私は針で糸を縫う
赤い糸で
鎖編みに

※カシュニッツ（1901～1974）は
ドイツの女流詩人

私たちのいる浜辺

私たちがいる浜辺から
いっぱいに拡がった銀色
月の見えぬ夜に
無花果の谷を通る
燃えさかる恥辱
肉欲の愛
無限の饒舌
見交わす目の光
家屋の外壁
机にベット
二人を本気にさせる
その男は別の誰かに
別の誰かはまた別の誰かに
手を使い舌を交えて
朝がしらじら明けるまで
まるで赤鹿の生肉
望み

詩歌三評

阿武千代 著　陸軍看護婦

略　歴

1924年　山口県に生まれる
1943年　看護婦養成所（旧日産化学中央病院）を卒業。後に久留米陸軍病院勤務。
1944年　広東（現広州）で陸軍看護婦として伝染病棟（コレラ、腸チフスなど）に勤務。
1945年　敗戦。収容所生活を送る。
1946年　五月復員
1966年　渡仏。草花の造形について学ぶ。
1972年　枯れ物による小品展開催（パリ・三越）
1975年　フランス生花協会主催コンクールから招待される。リュクサンブール公園、ベルサイユ宮殿などに展示。「フィガロ紙」が絶賛。
1976年　帰国。豊田忠治と結婚。
1985年　草月展（東京・高島屋）において草月出版新人賞を受賞、前年の受賞者は假屋崎省吾。
2010年　「陸軍看護婦」初版を出版

戦後の後遺症

市川恵子

戦中の出来事を明確に語る人は限られている。語らない、語ることのできない人のほうが大半ではなかろうか。それは、「語る」という行為がその出来事を全て受け入れ、自らの中で消化し、客観的な眼差しで事象を見つめることができなければならないからだ。

『陸軍看護婦』の著者、阿武千代さんは紛れもなく、前者の語る人だ。それは容易いことではない。この書を手渡されたとき、わたしは自らの祖母を即時に思った。

阿武さんは大正十三年に出生され、若き日を陸軍看護婦として従事された。わたしの祖母は大正六年生まれ、同じく戦中看護婦として従事していた。母に尋ねても、陸軍か海軍かどちらに従事したのか未だわからないという。戦後、祖母は保健婦、助産婦、看護婦として群馬県の一画で医師のごとき奮闘していた。それは祖母自身からではなく、祖母にお世話になったという住職さんや村人から聞いたものだ。祖母が亡くなったとき、霊柩車の助手席に遺影を掲げ座っていたわたしの眼に映ったもの

は村人が全員農道へ出て、祖母へ合掌している姿だった。
わたしは祖母自身から戦中・戦後の話を聞いたことは一切ない。娘の母にも語っていないのだから、おそらく誰にも話さなかったのだろうと推測する。
対して、阿武さんは克明に記されている。ここまで日常を細やかに描いているということは、戦中に日記などで日々の仕事を記録していたのだろう。日本から離れ、中国・広東に身を置いていたことも俯瞰的に戦争を眺めることができた、ひとつの要因かも知れない。
このように戦争時の生活、陸軍看護婦としての日々を、後世に遺される仕事をされるのは相当なエネルギーを必要とする。わたしのような戦後生まれの戦争を体験していない世代にとっては貴重な一冊であることに間違いはない。また、単なる善悪や主観のみで描かれていないこともこの書の特筆すべきところであると思う。

阿武さんは広東で伝染病院での勤務をされることになるが、日々繰り返される生死の狭間で冷静に物事を見つめていらっしゃる。
―真夜中、死者と共にいるひとときは、いやだとか、淋しいとか、恋しいとかのわがままな心は乗り越えられ、誰もが行きつく人間の死に対して自分を置き換え、静寂なしじまの中で謙虚になれるのではなかろうか、戦争はいやだけれど、このような経験は、一生のうちで何処でも出会う事の出来ない、得がたいものではなかっただろうか。（p45～46より抜粋）
死者と共に生きている厳しい生活のなかでわずかな光を見い出しながら自己と闘い、看護婦として重い任に従事されていた、阿武さんの真摯な眼差しが伺える。
そして戦争という異常な環境が、人間の精神を狂わせてしまうことにも痛烈に触れられている。古兵の新兵へのいじめのエピソードだ。新兵への待遇は訓練を超え、奴隷に近い扱いを受ける。文中でのN伍長の振る舞いがそれだ。初年兵に腕立て伏せの格好をさせ、尻を出させる。何の理由もなく、尻が紫黒色に痣ができるまで竹箒で殴っていく。
人間は極度なストレスを抱えたときにどうやって自己を見失わずにいられるのか。自分を信じ、諦めずにいられるのか。これは現代の凶悪事件や依存症の心理にも当てはまるように思う。
阿武さんは「再刊によせて」の章で、〈事の如何を問わず、戦争とは殺し合いである〉ときっぱりと明言されている。戦争とはお国のためと、事の善悪を超え、人間の精神までもを破壊してしまう恐ろしい行為。その戦争が直に戦争に関わった世代だけでなく、戦後のわたしたちにまで少なからず、影響を及ぼしているという事実。

わたしが小学六年生の頃、友人たちを連れて、祖母の住む群馬県へ遊びにいったことがあった。常日頃疑問に思っていたことを、夕食時に何気なく祖母に尋ねた。「なんで、うちにはおじいちゃんがいないの？」祖母は無言だった。

翌朝、友人の一人がわたしに耳打ちをした。「昨日の夜、恵子のおばあちゃん、独りで泣いていたよ。」即座に夕食時に尋ねたことが原因なのだと思った。何の悪気もなかったのだが、とてつもなく悪い事をしてしまったのだと感じた。

それから数年経ち、母から一枚のモノクロ写真を見せてもらった。そこには、一人の青年が写っていた。母の顔立ちにそっくりな青年だった。母は、「この人がわたしのお父さんよ。」と言った。わたしの父や兄にもこの写真は見せたことがないという。戦前に母を身籠もった祖母は戦地へ赴く恋人に対し、余計な思いはさせまいと母を身籠もったことを告げなかったという。戦後、その人は帰還したが、別の女性と家庭を持った。

母は何度も父へ手紙を出したというが、返事は来なかった。或る日、最初で最後の一通が届いた。そこには、「わたしには家庭があるのでもう手紙はよこさないでほしい。」とだけ綴られていたそうだ。

祖母は生涯独身を貫き、村の医師代わりとなって身を粉にして働いた。愛するひとと結ばれることなく、別の愛を探すわけでもなく。そして、母は父親の愛情というものを知らずに育った。夫からの愛情にもあまり恵まれたとは言い難い。

小学生の頃、よく友達のお母さんから、「恵子ちゃんは可哀相ね。」と言われた。わたしは「可哀相」の意味をよく知らなかったし、何故そのように言われるのかも理解できなかった。

愛を得ることのできなかった祖母、愛を伝えることのできない母、そしてわたし。

戦争とは戦中の出来事だけを言うのではない。こうして、戦後生まれのわたしにまでも後遺症を確実に残す。

そうした〈戦後の後遺症〉を抱えた人が、世代を超え、国を超え、どれほどいるのだろうか。

意を決し、戦中の看護婦としての記録を克明に残してくださった、阿武さんのこの一冊に出合うことがなければ、戦争を語ることのなかった祖母の姿に改めて思いを馳せることもできなかったろう。そして、戦争のもたらす二次的、三次的被害というものを今一度考える機会も与えていただけた。著者の阿武千代さんへ重ねて感謝を申し上げたいと思う。

阿武千代さんのまなざし

服部　剛

私は戦争を知らない世代です。在りし日の祖母や以前働いていた老人ホームにいたお年寄りの方々から、戦争がいかに悲惨なものであるかを聞いてきました。私が子どもの頃も、夏休みになると終戦の日が近づくにつれて関連する番組が多くなり、テレビに映る戦争体験者のお婆さんが「私は無数の遺体が横たわる焼け野原を歩き続けました…」と語るのを聞いて、戦争の恐ろしさを思いました。その印象は心に残り続け、大晦日になると両親に連れられて行った深夜のお寺で、賽銭箱を前に〈世の中が平和でありますように――〉と、無心で両手を合わせました。その平和への願いは、大人になった今も変わることがありません。

戦後七十年以上の歳月が流れ、平成最後の年を迎えた今、阿武千代さんのお書きになった『陸軍看護婦』を読ませていただき、改めて、これからの時代を生きる私たちが〈忘れてはいけないこと〉は何か、を考えています。

まず印象に残ったところは、阿武さんがキャリアの長い看護婦・武内さんと深夜勤務をした時に、赤痢患者が息を引き取った後の場面です。日頃は忙しく働く武内さんは、祈りをこめて患者の体を清拭し、大切に抱きかかえ、そっと手を添えてその瞼を閉じます。〈やせさらばえた死者の上に、一瞬、精気がみなぎり、おだやかな、やさしい風が吹いているふうであった〉という描写から、死者と生者の真の心の交流があるのだ…と思いました。

また、当時の『南枝日報』に投稿して掲載された阿武さんの詩から、その人柄が伝わります。

疲れきったよれよれの心
よれよれの体
よれよれの軍服
ボロボロの靴
此処で軍靴の主はながい休息をする

やがて木綿（もめん）の赤い花が咲き
兵は眠りから覚めたのだ
さわやかな緑の朝

この詩のなかで、阿武さんが負傷した兵士をみつめる温かなまなざしと〈回復して、生きてほしい――〉という願いは、生死の狭間にいた兵士の心をきっと癒したことでしょう。

そして何よりも、この本を読んで一貫していると私が思うことは、阿武さんのまなざしに見出される、周囲の人々の人間味あふれる様子です。　戦時中という時代状況のなかでも、部隊長の優しい笑顔や、こっそりパン食を持ってきてくれる看護助手の高田さんや、〈自分が出来る事は、いまの一分、一秒を最大限に努力をして悔いのないように生きる〉という、伊丹大尉等…　阿武さんの瞳に映る当時の人々の姿から、私は〈人間の優しさと希望はどんな時でも失われることはない〉と思いました。

阿武さんが得意とする生け花の才を増田準尉に見出され、手伝うことになり、心が高鳴る場面からは、ナチス収容所という状況下においても生きがいを見出すというヴィクトール・E・フランクルの著書『夜と霧』のメッセージを想起しました。その特技は、戦後に営内で行われた文化祭でも生かされ、読んでいて私も嬉しい気持ちになりました。また、演芸大会では手作りの楽器によるコンサートや、遠くにいる母を想う『瞼の母』の芝居を皆と観て涙を流す場面から、人々がそれぞれに自分らしい姿で時間を共に織り成す雰囲気が手に取るようでした。

やがて日本へ帰国する日は訪れ、憧れの「B伍長」が、引き揚げ船に乗る前の阿武さんに声をかけ、互いの言葉を交わす場面は、まるで映画のようで感動しました。

（――阿武さん、雨の日も晴れの日も明るさを失わずに歩み続ける長い生涯のなかで、純粋に人を好きになった美しい思い出があって、本当に…良かったですね）

＊　＊　＊　＊　＊

最後に、この本から受け取った大切なメッセージへの感謝を、お伝えします。阿武さんの人生が物語ることは、どんなに時が流れても消えない〈人と人の間の絆〉がある、ということです。そして、戦争はかかわる無数の人の魂に深い傷を残す、ということ。そのような経験を通り抜けてもなお、人間の心に宿る本来の善性と、生きる歓びを信じる阿武さんのまなざしに、私は深く共鳴するのです。

私は今――目を閉じて、阿武さんに心を合わせ、この本にこめられた言葉にならない想いが平成の次の時代の人々へと語り継がれることを、切念します。

東京大空襲・広島と長崎の原爆の犠牲者・知覧から戦闘機に乗り飛びたち、母の名を叫びながら戦火に散った若者たち…　あの日、世を去った多くの方々の御魂（みたま）の深い哀しみと犠牲が決して無駄になることなく、天から地へと吹き渡る新たな時代の風となりますように――。

「陸軍看護婦」にみる、戦時中の歌の役割

前木　久里子

「子どもは話せるようになる前に、歌う。文字を書けるようになる前に、絵を描く。歩けるようになったとたん、踊る。人は根源的に表現する生き物なのだ。」

―フィリシア・ラシャド（女優）

人が根源的に行うこと、勿論それは「表現」だけではないだろう。この「陸軍看護婦」だけを見ても、「幸福を求める」「人を助ける」「学ぶ」「恋をする」等々、戦時下の極限状態において人がどのように生きたのかが、様々なエピソードを通して描かれていることでもわかる。そのどれもが意味深いものではあるが、著者・阿武千代氏が戦後にいけばなの道を極め、晩年にはこの本の執筆を生きがいにされたほどの表現者であったことから、彼女が選んだ「戦時中における歌」に焦点を絞って、「陸軍看護婦」を紹介したいと思う。

「陸軍看護婦」は、一人の軍国少女が未知の国南方に憧れ、第二次世界大戦中の広東で厳しい環境と経験を通して一人前の陸軍看護婦として成長していく様を綴った体験記である。また、プロパガンダを持たない一国民の目から見た戦争の記録でもある。この著作の中で阿武氏は、時代の空気を客観的に映し出すべく、当時の歌の歌詞を多く引用している。昭和初期、子ども達は何も知らずに兵隊ごっこや軍人讃歌の歌を歌い、一般民衆も「爆弾三勇士の歌」などの軍歌に踊らされていた。そして幼かった当時は何の自覚もなく歌っていた著者本人も、それらの歌からは戦争の悲惨さが抜け落ちており、国民感情を煽るものだったことを認めている。

その後、アジアにおける日本の戦局がまだ比較的優勢だった昭和十三年、日本軍は広東を占拠した。日本で、そして広東の在留日本人の間でも、「広東ブルース」や「花の広東航路」などの流行曲が歌われた。勿論、陸軍看護婦達も歌っていたのだ。その歌詞は、広東の景色や文化を表面的になぞっているだけで、負けた中国人の悲しみにも勝った日本人の喜びにも触れていない。歌だけ聞くと、戦争の影をなど全く感じさせない、甘ったるい昭和の流行歌だ。歴史的背景を知って聞けば、何と呑気で無神経な歌だと思わざるを得ない。

終戦間近になり、負け戦が続く梧州に開設された野戦病院では、志気の高揚のために「梧州良いとこ忘れられない～」で始まる「梧州音頭」をみなで作った、とある。

この軽妙な歌詞だけ読むと、さも梧州が愉快な場所であったかのように錯覚しそうになるが、無論そうではない。電気もない病院の中モーターで電気をおこし、百人あまりもの負傷兵を徹夜で手術、コンクリートに蓆を敷いて患者とごろ寝、と相当ハードな状況だったのだ。だが、この歌詞はまんざら嘘ばかりでもないのだろう。辛い入院生活を送る患者のために、楽しい思い出だけを抽出し、ユーモアを混ぜつつ、明るいメロディーにのせて、なんとか苦しい時を共に乗り越えようとしていたに違いない。

やがて終戦を迎え、敗者である日本人は医療従事者も患者もみな、大崗にある捕虜収容所に送られたのだが、そこで流行った歌「大崗音頭」は、かつて聞いたこともないぐらい見事なカラ元気ソングだ。唯一、「故郷を偲んで」という言葉だけが、異国での収容所生活をおぼろげに反映している。皆、どんな気持ちでこの音頭を歌っていたのか。こんな曲でも歌わなければ、誰もが乗り切れない時期だったのだろう。

そして最後に挙げられた歌は、戦後約四十年を経て台北で行われた「戦友会」にて台湾人の看護助手達が歌った思い出の「看護助手の歌」である。この歌詞には、これまで出てきた歌にはない、生真面目さと清らかさがある。ナイチンゲールのような精神性と日本に対する忠誠心に溢れている。それもそのはず、台湾で選りすぐられた優秀な看護助手達は、広東桜のように明るく、日本人よりも純粋な愛国心を持っていたそうだ。終戦まで尽くした日本軍にも戦後に支配者となった蒋介石にも報われず、数十年間続いた戒厳令下においても、この歌詞をずっと忘れずに生きてきた元看護助手達の歌は、元陸軍看護婦達の心にいかに響いたことか。

歌の歌詞というものは、極めて純度の高い文学だ。歌の趣旨に沿わないものは排除され、重要なメッセージは比喩や心地よい語感で印象的に強調される。そこに音楽的要素も加わるのだから、人の心に残り影響を及ぼすのは当然のこと。阿武千代氏がこの本のため選んだ歌は、良くも悪くもそれを証明している。だが勿論、歌詞の言葉が全てではない。「陸軍看護婦」を一読すれば、勇ましい軍歌から抜け落ちた戦争の残酷さ、流行歌が覆い隠そうとした厳しい現実、明るい音頭が忘れさせようとした孤独、そして「看護助手の歌」には収まりきらなかった看護婦と看護助手の功績、苦労、そして表現活動を知ることができるだろう。そして、この本にも書き記されなかった、数え切れない程の史実があることを私達は忘れてはならないのだ。

「戦争」を考える気怠さについて

近藤　頌

この本のタイトルを見たとき、なにやらまずいものを受け取ってしまった、という気分になった。

『陸軍看護婦』という題からして、内容は明らかに「戦争」が絡んでくることが容易に想像されたし、そしてそのことに対して、ある種の気怠さを覚えずにはいられなかったからだ。

「戦争」という単語が頭の中に現れたとき、そこにすっと忍び込んでくる感情は、「絶対にしてはいけないもの」というある種神聖化された冒しがたいものである。ここで断っておきたいのは、ぼくはなにもそれがいけないことだとは少しも思っていないし、ましてや、戦争がしたい、なんてことは自分の幹細胞ほども考えてはいない、ということである。

しかし今こうして感じている「戦争」という単語の裏にある拒絶反応じみた身体感覚は一体なんなのか。考えるのを止めたくさせる憑きものの正体は一体なんなのか。恐らくその根元にあるのは、人は体験していないことをどこまで自分の「事」として考えることができるのか、という手垢のついた命題である。人から伝え聞く話を自分の事として体感しその身の糧とできるのか、といった問いかけに好きでもないのに詰め寄られているので気が重いのだ。

はっきり言って、ただ人の話を聞いただけではおいそれと共感できないぼくである。確かに映画や小説などから得られる体験は計り知れないわけだが、それは製作側の人たちの労力と気遣いによって成り立っているのだ。解かれることを目的としたある問いについて答えようとするのは強制感が付きまとう。基本的にぼくは、自分の暮らし、というよりも自分の生き方が最優先であって、面倒には巻き込まれたくないのが本音である。それにも関わらず、他者の問題を考え解決の糸口を探さなければならないといった矛盾の克服が試されるというのは、重荷以外の何物でもない。

よく耳にする、体験しなければその事の本質はわかり得ない、という意見は本当にごもっともな見解で、寄り添いだ暖かさだを謳ったとしても結局現実は自分の力でなんとかしなければならないことが大半だ。その自分の力を回復させるための休息場所の確保や問題解決への技術的な教えを受けるには他者が必要不可欠というだけであって、最終的に他人がどうにかしてくれることなんてのは、ぼくの身の周りでは起きたことがない。

こういったことを表立って言うと、あなたは強いから、

といった弱者強者論的な展開がなされて本筋のすり替えがとり行われる訳だが、ぼくが言いたいのはそういうこととは切り離したい。問題を解決したいのか、したくないのか。したいならばどうやってそれが可能になるのか。不可能ならばどうすれば自分は納得できるのか、それらを考え続けること、または忘れることが現状打破なのであって、そこに踏み出すまでの停留期間については、また別の話としかここでは言いようがない。

他者との関わりの難しさは、こういった話とも繋がっているように思う。最近は多様性が謳われ始めていて、相手を理解することができない、わかり合えないという事実は事実として認めた上で、それでもあなたがあなたであることを尊重し合えるような社会が目指されつつある。そんな中でも物騒なニュースは絶えないわけで、そして今の政権の様子を調べてみると、どうにもなにかしらの準備と思われるような節々を感じずにはいられないことが少なからず見受けられて不安に思うわけだ。

この本の著者、阿武千代さんは大正十三（一九二四）年生まれ。小学校一年生だったという昭和六（一九三一）年には満州事変が起こっている。記憶の残る頃には国は当たり前のように戦争をしていて、そして生活の中に溶け込んでいた。この本の副題に「波第八六〇一部隊の青春」ともある通り、この本の中には一人の人間の、一つの青春が淡々と記録されている。ただ今の時代の「青春」と異なる雰囲気があるのは、国が戦争をしていて、また実際に戦争によって振り回される様が、そして振り回されながらも生活していく様子が伝わってくるからだろう。

もし仮に、これから日本が戦争をするか、しないかの瀬戸際に立った時、その時ぼくたちに選択の余地があった時、しないという選択ができるのかどうかを考えてみる。例えばある場所、ある地域が攻撃されるなり、攻撃するなりの既成事実が生まれ、その現場では無為に命が失われたとする。もしここで、それでもしないと言えば、現場からは命の失われた悲しみが滔々と伝えられ、当事者でない者がなにを言うか、恥を知れ、といった具合になる。「命」を盾にして事が進んでいき、お互いの国はお互いの正当化が雄弁に語られ、戸惑いも虚しくあれよあれよと開戦は免れえないだろうと想像される。

戦争をしない、という意思を貫くことは時にその「命」を掛けることでもあるのだろう。自分にその度胸と忍耐があるかどうか、正直疑問は拭えない。

この本の著者は子どもの頃から身近に戦争があり、生活の中にも戦争があった。「生きていく」ということに重きを置いたから、戦争に参加しないという選択肢はなかったのであろう。

もしぼくたちに選択権がなく、これから日本は戦争をする、となったら、きっと多くの人は「生きていくため」に戦争を生活の中に取り入れるだろう。取り入れて柔軟に対応し、どうにか災難が降りかからないように、ひとつの消極的な態度でもって生きていくほかないだろう。そうして暮らしていくうちに自分にも巡ってくる死の予感。そうなって初めて悟るのだと思う。戦争なんてするもんじゃない、と。

今ぼくができることはなんだろうと考えて、思い当たる節の少なさにがっかりする。かと言って積極的になりたくないと思う自分もいる。ただ生きていきたいとした結果、戦争を招き寄せるなんてことがありうるのかもしれない。

この本が教えてくれたのは、戦争が始まっても生きたいのなら生きるしかない、という当たり前のことだけれど、その諦観は必ずしも悪いことではないことも読んでいて伝わってきた。

戦争を体験していない一若者であるぼくの気怠さはまだまだ拭いきれそうにない。しかしこのままでは、また違う形で繰り返される事に巻き込まれるのかもしれない。そしてそれを、自業自得だと笑う者もいるのかもしれない。そうならないためにどうするか。少しだけ拭うのを手伝ってくれたこの本に、まずはとりあえず感謝したい。

日常に見る戦争の異常

曽我貢誠

今から一年前、この号で「陸軍看護婦」を取り上げることにした。そこで著者の阿武千代さんがいるという老人福祉施設に手紙を書いた。「トンボの詩歌三評であなたの本を取り上げたいので、一言書いていただけませんか。」ほどなく老人福祉施設から手紙が届いた。ワクワクしながら手紙の封を切ると、私が送った手紙が封も切らずにそのまま入っていた。送り返されて来たのだ。職員の筆跡で「そのような者はおりません。ご期待に沿えず申し訳ありません。」とだけ書かれていた。この企画ももう終わりかと諦めかけていた。それから半年後、阿武さんの義妹さんと連絡がつき、健在という知らせが入った。「えっ、本当に……。」うれしい知らせであった。阿武千代さん。山口県で生まれ本年九十五歳である。

戦争にまつわる書籍は多い。新聞記者が書いたもの、軍のトップや、作家が書いたもの。兵士や庶民が語った証言集などがある。

この本はうら若き二十歳の女性の目を通して、戦時中

の中国での日常を記録した貴重なものである。終戦末期、昭和十九年四月一日、日本を離れ、台湾から病院船「うらる丸」に乗船し、中国広東に到着する。それから、翌年敗戦までの一年数ヶ月の日常を主に書いている。戦争反対でもなければ、鬼畜米英でもない。二十歳の曇りのない女性の眼を通して当時の生活を淡々と書いているのだ。この「うらる丸」は下船後すぐ、九月二十九日ボルネオ沖で沈んだ。アメリカの潜水艦フラッシャーの攻撃により撃沈されたのだ。八百人近くの人命が失われた。

敗戦に向かう昭和十九年から二十年にかけて、太平洋上での海戦や沖縄での地上戦、日本全土への空襲や広島長崎への原爆など数々の戦争の悲劇が繰り返された時期である。

この当時の国際情勢は、昭和十八年十一月のルーズベルトの要請でカイロ会談が行われている。イギリスチャーチル、ソビエト、スターリン、中国からは中華民国代表、蒋介石が出席した。中国人民解放軍の毛沢東が勢力拡大のため延安にいたころである。

阿武さんが中国に上陸して間もなく、昭和十九年四月十七日から日本陸軍による大陸打通作戦が行われた。通称一号作戦と呼ばれ、香港と北京を結ぶルートを補給路にするため大々的な軍隊が投入された。当時南太平洋上では次々と日本軍は敗北を重ねていた。そして南方からの補給路が完全に断たれつつあった。そこで中国北部とインドシナ方面の陸路での補給路を確保するためこの作戦が行われたのだ。十二月十日に一応作戦は終了した。だが日中双方に甚大な被害が出た。戦死戦病死者十万人、死傷者七十五万人などと記録にある。（注、『記者が語り継ぐ戦争十六、中国慰霊』読売新聞社一九八三年より）

丁度そのころ四月から阿武さんは、看護婦としての一歩を踏み出した。中国広東省にある広東陸軍病院の赤痢病棟に配属される。そこから見える街の様子や仕事の内容が淡々と綴っている。

「霊柩車が大勢の人達を従え、雨の音と共に赤痢病棟の前を通っていく。二人がかりで死者を戸板に乗せていくもの、たった一人で手押し車に乗せていく者とそれぞれだ。母親がすでに息を引き取った我が子を、泣きながら置き去りにしていく。いとしい我が子でも死んでしまえばその子を葬る事ができないほど貧しいのだ。」

この中に当時の中国の街の様子が分かる。大名行列で死者を纏る者もいれば、道端に最愛の我が子を置き去りにしなければならないほどの極貧の人もいる。目の前に繰り広げられた広東の街は、金持ちと商売人と今日をまともに生きることができない極貧者にあふれていた。ま

だ、客観的に見る余裕があった。しかし間もなく日本軍人多数の死傷者が運び込まれることになる。

「初めて個室の患者を見たときはびっくりした。骨と皮、骸骨が横たわっていると思った。眼窩の奥、骸骨の眼が動いた。生きているのだ。骸骨が口を動かし、しわがれた声で何か言っている。一人一人の負傷兵士を、心を込めて看病していく。

お尻を水できれいに拭き普通綿をあてがう。きれいに拭いたお尻からすぐに粘液と血便が流れる。アメーバ赤痢なのだ。汚物は突き当りの汚物捨て場に捨てに行く。『人の便が汚い、と思っているうちは、一人前の看護婦ではないのよ。』」

先輩に教えられ阿武さんは成長していく。

「真夜中、死者と共にいるひとときは、いやだとか、淋しいとか、恋しいとかのわがままな心は乗り越えられ、誰もが行きつく死に対して自分を置き換え、静寂なしじまの中で謙虚になれるのではなかろうか」

阿武さんはこんな心境に至る。死に対しては、地位もお金も名誉も関係ない。無心な気持ちで見送る姿に人間としての心の広がりを感じた。

ふと父のことを思い出した。私の父は大正十一年生まれ、二十歳になった頃徴収され北支に派遣された。現在の北京の北方である。その後、南のニューギニアに派遣された。阿武さんが広東で看護婦をしていたころ、私の父はニューギニアで戦っていたのだ。よく調べてみると、ニューギニアは、高温多湿の土地柄である。衛生環境が悪く赤痢やコレラや風土病が蔓延した。極度の食料不足などから多くの兵士が倒れていった。ＮＨＫの記録映像によると投入された日本兵は十四万人余り。うち死者が十二万七千六百人、そのうち疫病や空腹で十一万四千八百四十人が死んだとある。ほとんどは戦わずして亡くなった。餓死である。どうにか父は生き残って帰ってきた。父からほとんど戦争の話は聞いた記憶がない。ヘビやトカゲや大ネズミは食べたということは聞いた。父は、すでに亡くなったが、この本を読んでいるうち、父が生きている間にこちらから聞いておけばよかったと後悔している。父は戦争についてはほとんど語らなかったが、こちらから戦争について聞いたことも一度もなかったからである。時すでに遅し、である。

戦争体験が風化する今、次の世代に残したい一冊である。

トンボの輪

現世の仕事

二月の初旬、子宮と卵管を全摘出した。数年前から手術をしなければいけないと医師から告げられていたのだが、年齢的に子宮を全摘出することに抵抗があった。そのうちに状態は悪化し、他臓器にも影響を及ぼしてきてしまった。それで今回手術をすることに踏み切った。わたしは、今回の手術をすっかり甘くみていた。悪いものを取り去れば、体調は回復し、月のおおよそを寝たきりに費やしていた時間はすぐに取り戻せると思っていた。しかしながら、臓器をまるごと摘出するということはそれだけ体に負担が残り、全快には時間がかかる。

手術前、医師より、もしものとき余命宣告は望みますか？　臓器提供はいたしますか？　と淡々と尋ねられた。その場で答えなければいけなかったので面食らってしまったが、そのとき、人のいのちがとても儚く思えた。事務的にわたしは書類に署名をし、その場は終わったのだが、ああ、万が一にもう目覚めないことがあるのかも知れないのだと思った。

よく大病を経験したかたがその後、ぱったりと筆を置いてしまったり、人が変わったようになったりすることがあるが、その気持ちがわからなくもなかった。

手術は無事に終わり、その後しばらくは痛みに耐えながら、辻井伸行さんやフジ子・ヘミングのピアノ演奏を聴いていた。ラジオのノイズは傷に響くし、テレビを観る余裕はない、本を開くこともできなかった。

幸い、大部屋の窓側のベッドだったので、毎日空ばかりを眺めていた。あんなにも長い時間、空をただ眺めていたのは初めてだったろう。

空は夜明け、朝、昼、夕刻、真夜中と、もちろん様相や色は異なるのだが、一刻一刻留まることを知らず、流動的なことに驚いた。雲は一瞬でもじっとしていることはない。渦を巻いたり、靄やマーブル状になったり、一筋の川や孤島にもなる、表情豊かな存在で正に〈生きている〉のだと感じた。

言葉を発しない初春の空は静かに呼吸だけを繰り返していた。

わたしは手術前、肉体、精神、魂はそれぞれ独立しているものと思っていた。特に、肉体は現世での借り物と思っていた。しかし、それは間違っていた。この体もわたし自身を支える大切なものなのだと知った。

随分前に、わたしは植物人間になる可能性があります、と宣告されたことがあるらしい。らしい、というのは当然わたしがそのとき意識がない状態で、後に親から教えてもらっ

たからだ。幸い、或る日ぱたっと意識が戻り、後遺症も残らず、現在に至っている。

或る人が言っていた。死を迎える人は現世での人間としての仕事を終えた人なのだと。

わたしは今でも度々その言葉を思い出す。何度も命を救われたわたしには、まだまだ沢山の仕事が残されているのだろう。

全快したとき、どんな自分になるのか、何をしようとするのか、今から楽しみでもある。

（市川）

四尾連湖所感

（なんだか苦手だなぁ）

昨年の、あれは六月のはじめ頃だったと記憶している。この詩誌トンボと縁が深いという、山梨県市川三郷町にある山の山頂付近にひっそりと佇む湖へ行ってみないか、とのありがたいお誘いに導かれてきた四尾連湖だったのだが、不躾にも自分は内心そんなことを思ってしまっていた。

苦手。いや、ちょっと息苦しい。それは標高が高いせいもあるのかもしれないが原因は他にもありそうだ、ということはなんとなく感じていた。確かに、湖の透明度は高く、それを囲む山々の茂り方は賑やかで、時折晴れ間がのぞいてくると、目の前の上下一面が緑と青で突き抜けていく遠さを受け取ることができる。

しかしどうしてか、自分の気持ちは色を失いかけていた。どうしてなのだろう。どうして目の前に広がる、簡単に言ってしまえば〈きれい〉な風景に対して、敵意にも似た警戒心を抱いているのだろう。半年以上、ずるずると尾を引く具合に考えていた。

ひとつは単純に見慣れていた、ということ。これは連れて行ってくださった方にも伝えてはいたのだが、自分の出身地は山梨県で、しかも中学時代を過ごしたのは、今回の四尾連湖の隣りの町、増穂町（現在は合併して富士川町）であった。近い。

そしてもうひとつ重なる理由があるとすれば、その中学時代、あまりいい記憶がないのだ。思い出すと善意で胸が塞がれて呼吸困難、とは大げさだが、とにかく窮屈さで身を満たすことになる。

きっとこの過去の記憶の影響を強く受けているからなのだろうな、ということは行った当時から勘付いてはいたことであった。けれども時間が経ってみてふと思い出し、四尾連湖の様子をスマホで撮った写真から眺め、影響されるがままに身を任せてみると、意外にも苛立ちめいたものが沸き立ってくるのに驚いた。

この湖の澄ました純真さ。その小ささ。のろのろと泳ぐ魚。激しく囀するウグイスの呼び声。それら大自然の静かな装いを悠然と断ち切る旅

客機の流れ去る音。

この情景はまさに、中学時代の自分が表されていたように思ったのだ。純真さを着飾り、悪意を殺して周りとの交流を遮断していたあの頃。周りが抱いていたであろう真面目なコンドーくんを無自覚に守って、勝手に息苦しくなっていた独り善がりなコンドーくんの底にいた景色。それが、隣町の、山のてっぺんの、鏡のような湖から不覚にも感じてしまったものだから、生意気にも、自分とも縁がある場所のような気がしてしまった。

（近藤）

理想の生活×夜の言葉

五年ほど前から仕事で石川県に単身赴任をしています。石川県能美市辰口温泉、金沢市と小松市のちょうど中間に位置し、夜は真っ暗、周りは田んぼ、白山の自然の景観が美しい田舎町です。ペーパードライバーだった私は、車も持たず、「大丈夫、歩いて通勤している人もいる」という会社の人を信じて、アパートから会社までの往復８kmの通勤用にママチャリを伴って赴任しました。ところがどっこい、今晴れていても、あっという間に空は曇り、そして雷、雹、暴風雪に変わるという、泉鏡花の幻想文学を生んだ地域そのものでした。ここの天気は20分もしないうちに目まぐるしく（幻想的に）変わります。冬の通勤は冬山装備、ゴアテックスのレインウェアに登山靴という出で立ちです（あくまで私の個人的な趣味です）。北陸の幻想的な自然と若干不便な生活（加えて、加賀の伝統文化・芸術）と最先端技術開発の仕事、そして帰省先東京都心の効率的で便利な生活、その間を毎日、毎週、振り子の様に往復する生活が始まりました。

そんな生活がしだいにより大きな世界へと空想の翼が広がります。すると、私たちの住んでいる世界の理想の未来は、必ずしも都会や職場の合理的で効率的な昼間の生活で代表されるようなものではないこと、さらに深く見えないところに、人間にとってより大切で不可欠な精神的な要素が隠れていることに、あらためて気づく機会が多くなります。それは、アーシュラ・K・ル＝グウィンの次の言葉に端的に表現されています。

「人間は昼の光のなかで生きていると思いがちなものですが、世界の半分は常に闇のなかにあり、そしてファンタジーは詩と同様、夜の言葉を語るものなのです」

「意識下の闇の世界を旅して発見した夢の素材を言語化する―」（「夜の言葉」岩波現代文庫）。

山の自然が豊かにならないと海も枯渇するように、夜の言葉、闇の言葉を欠いた世界には豊かな想像力は生まれません。そして、人間が、宇

宙の原理を理解し、世界を破壊できるほどの（神話の神のような）力を獲得しつつある現代こそ。人間の未来に向かって、命とは何か、人間性の理想・本質とは何か、進むべき方向は何処かをもう一度問い直す、詩人・文学青年が語る夜の言葉の重要性がこれからますます重要になるはずです。彼らが、新しい時代に、何を感じ、何を見るのか。トンボに集う貴重な感性への尊敬と期待がますます高まります。

（光彦）

島岡明子さんを悼む

二月下旬、訃報は種川とみ子さんからメールでもたらされた。

いつどこで知り合ったのか判然としないが、秋山清の会「コスモス忌」だったのかもしれない。静岡にある実家の年代記を綴った『蕎麦屋太平記』（２００５）にバーコードを所望され使っていただいたことが始まりだ。ということは十数年のお付き合いということになる。

上京される機会は年に２回の杉並弦楽合奏団の定期演奏会、年末の「コスモス忌」、更には小澤寿美恵さんの劇団公演でご一緒させて頂いた。夕方には東京駅大丸ビル九階の「すし鉄」が定番のコース。八十歳代でも頼むのは熱燗にお冷。その後『紅爐』私記　同人誌三十年」（２０１２）をまとめたい、というので頻繁にやりとりするようになった。その老舗そば屋「岩久」での出版記念会も懐かしい。それ以降も手紙のやりとりが続いた。浅草寺に詣でて神谷バーで尾張とし子さんと三人で会食したこともあった。

誰におもねることも、へつらうこともなく、いつもきちんと自分の意見をもっていた島岡さん。もちろんこちらの意見も聞いてくれた。人は、九十六歳で亡くなられたのなら、というかもしれないがそれは違う。その人と向き合った、共に過ごした時間の密度の濃さが大切なのであってそれがすべてなのかもしれない。「相澤君がね、三島神社の境内でね」といって相澤尚夫さんとのことを楽しく語ってくれたのだが、話の中身はなんとも書きづらい。

おもしろい話をひとつ、ある時会話のなかで突然「ヘレンケラーに会ったことがある」というのでびっくりした。調べると戦前には昭和12年4月から8月にかけて日本各地を訪れ、戦後も2度来日しているから、講演をきいたのか、インタビューの席にいたのか、もう少し詳しくきいておくべきだった。

最後の葉書は昨年秋、アジア大会でメダルを量産した水泳の池江璃花子をほめていた。島岡さんも水泳が趣味だったという。そうか、蕎麦と水泳は長寿にいいのか。島岡さん、ありがとう。

（勝畑）

これまでの「詩歌三評」

創刊号　天野正男詩集　シャッポのない歌
評・服部剛・古屋久昭・曽我貢誠

二号　野沢　一　詩集　本葉童子詩経
評・酒井　力・古屋久昭・曽我貢誠

三号　北川太一著　いのちふしぎ
評・樽見　博・野末　明・曽我貢誠

四号　田村勝久詩集　結城を歩き探すもの
評・武子和幸・関　和代・曽我貢誠

五号　秋山賢司著　碁の句―春夏秋冬―
評・松林尚志・伊藤　礼・郷原　宏・平　圭三
宇田川寛之・谷岡一郎・佐藤映二・下川敬明
島岡明子　蔦垣幸代　桐野昌三　原詩夏至

六号　谷川清二（渡辺文治）作品集
評・近藤　頌・服部　剛・市川恵子
前木久里子・曽我貢誠

七号　服部剛詩集　我が家に天使がやってきた
評・八木幹夫　原田道子　市川恵子　山根息吹
大井　玄　北川太一　長尾雅樹

創刊号以外は多少の在庫があります。
お問い合わせは編集部まで。
各号は四〇〇円、送料は無料です。

ファウスト　第Ⅰ部「悲劇」

勝畑耕一 訳・種川とみ子 画・熊野友嗣 編集

「『ファウスト』は文学であると同時に哲学である」
1797年6月、シラーはゲーテにそう書きおくった。
年下の盟友の言葉に詩人がどれほど励まされたか。
劇詩として訳されたファウストの原像がここにある。

定価　1620円（税込）　300頁
ISBN　978－4－938364－274

読者の輪（7号より）

★「我が家に天使がやってきた」は読みごたえがあった。八木氏の「想像力は時に未来からやってくる光を暗黒に変える。しかし、この詩編には日々の光や喜びを見つけ出す力がある」と。北川氏の「いのちの不思議のもとでは、普通の人間と異常な人間の境界など、実はどこにもないのかもしれません」などみなさんそれぞれ服部さんご夫妻の生き方に向かい合っていると感じた。（K）

★「我が家に天使がやってきた。」を購入したいと思いました。私の友人で特殊学級の教諭を長く務めた方がいます。彼女は神なきシスターのような芯の優しさは似ております。（U）

★曽我さんの「こころ」そうだなあと共感しました。市川さんの「生家跡」とても印象的でした。近藤さんの「気分」ふと読んで切なくなりました。服部さんの「地球ノ時間」本当に大事なものを考えさせられました。（M）

★熊野さんの「奥尻滞在記」ウニの破片が教えてくれる命の不思議と磯船に生きる交流魚労の描写がすばらしい。（K）

★「まあちゃん」は私の詩が素敵だという。私もそう思うよ。同時にあなたと出版社で会ったことを思い出しました。「人生行路開けゴマ！」ハッとしました。子供に読んであげた「車輪の下」を思い出しました。（A）

★金足農業楽しく読ませていただきました。驚くやら、感動するやら……。若いってすごい。監督の先生にも拍手です。（Y）

★マエキさんの詩には不思議な力があります。日英並列併記、才能の豊かさを感じます。仙酔を書いている吉田さんの別の面を見ることができました。（A）

★「夫婦」は表音的にフウフと湯豆腐のふうふが多面的で面白い。「本心」は本からの喪失と発見が律義にとらえられている。「帰途」は花火に重ね自分らしさを見ている。（N）

★訳詩素敵です。また耕太郎さんの「縄文展」「藤田嗣治展」に学ばさせていただきました。（H）

（返信から抜粋させていただきました。）

短信

▼高村光太郎の命日、四月二日に第六十三回連翹忌が日比谷松本楼で開かれました。北川太一さんの挨拶の後、高村達（写真家）さんの献杯で始まりました。全国から百名近くの方々が集まり、終始和やかな中で話が弾みました。

▼北川太一著「光太郎ルーツ、そして吉本隆明ほか」が出版されました。光雲から始まり、鷗外、心平などを語っています。吉本隆明とは中高年代で同窓、大学の頃からの知友です。光太郎をめぐる対談も興味深いです。また、阿武千代著「陸軍看護婦」も販売しています。メールかＦＡＸで弊社にお申し込み下さい。どちらも１３００円（消費税別、送料無料）です。

▼元新聞記者倉田耕一氏がこの三月「さくら舎」から「最後の大空のサムライ」を出版しました。土浦での第八期海軍飛行科予備学生の生と死を忠実に捉えています。興味のある方は書店で問い合わせを。（編集部）

編集後記

ひょんなことから映画制作に関わることになった。「みちのく秋田　赤い靴の女の子」という題名だ。野口雨情の詩で有名な横浜の「赤い靴」の話はよく知られている。同じような話が明治二十年ごろ北国秋田にもあった。

日本海に面した漁師の家で事件は起こった。姑の包丁を取り払いおうとした嫁ふじ。運悪く隣にいた子供のはつの喉を切る。即死だった。ふじは刑務所に収監される。そのときお腹に子供を身ごもっていた。誰の祝福も受けない子供が生まれる。ふじは亡くなった子供の名前を継いで新たにハツと名付ける。その当時アメリカから布教に来ていた若いカラ・ハリソンが慰問で刑務所を訪ねる。そして孤児ハツを育てることを決意する。やがてロサンゼルス、そしてハワイへ。貧困、差別、病気を乗り越え、ハツは三十二歳の人生を懸命に生きた。

宿命とは命が宿ると書く。刑務所で命を授かったハツ。彼女の詩が心を打つ。

運命とは、命を運ぶと書く／咲き終えたタンポポが、風に吹かれて／何処かへと運ばれていくように／降り立ったところで／〝命花〟は咲く

この三月、素敵なタンポポを探しに、監督たちと県内十か所以上のロケ地を車で巡った。タンポポは日本国中どこにでも咲く。だが、同じタンポポは一つとしてない。残念ながらこの旅でそんなタンポポには出会えなかった。秋田はまだ深い雪の下、じっと春を待っているのだろう。

（桶屋風太郎）

トンボ　第8号
発　　行　2019年6月15日
編 集 者　曽我貢誠
装　　画　成川雄一
発 行 者　勝畑耕一
発 行 所　文治堂書店
〒167-0021 杉並区井草2-24-15
E-mail: bunchi@pop06.odn.ne.jp
郵便振替　00180-6-116656
印刷製本　エム企画印刷（前澤 晃）
〒112-0005　文京区水道1-5-20

安川定男
詩と音楽

四六判　二三〇頁
二、六〇〇円

白秋、朔太郎の韻律を分析、ドビュッシー、ラヴェルを通じて詩と音楽との係わりを追究する。齋藤磯雄、高田博厚、山崎栄治らの良き師友に囲まれ、名ピアニストの妻との語らいの中で、著書は豊かな音楽的思考を培った。

秋山賢司
碁の句――春夏秋冬――

B6判　二〇〇頁
一、二〇〇円

碁の背後にはさまざまな文化的文芸的な厚みがあります。俳句がそのいい例でしょう。ほかにこんな素晴らしい知的ゲームは考えられません。本書を多くの方にお勧めするゆえんです。
（大竹英雄名誉碁聖）

吉田邦郎
忘れられた宗教哲学者 斎木仙酔

四六判　四二〇頁
三、五〇〇円

古今の宗教・哲学・詩歌・文学を包括し、独自の世界観を目指した斎木仙酔（一八八〇―一九三二）の評伝。仙酔の孫である著者、六〇〇枚の労作。年譜・書誌・四百人超の人名索引付。

阿武千代
陸軍看護婦

四六判　二一〇頁
一、三〇〇円

戦争末期の広東、厳しい軍隊の規定にあって、著者は赤痢、チフス、コレラ患者の伝染病棟で看護婦として従事した。波第八六〇一部隊とよばれた陸軍病院での実体験を綴る。佐藤愛子氏推選

曽我貢誠　詩集
学校は飯を喰うところ

二〇〇頁
一、五〇〇円

「いじめを一人でもなくすこと」「先生を五分でも早く家庭に帰すこと」そんな思いで、元中学教師が心を込めて綴った学校詩集！　昔、中学生だったあなたも読んでみて下さい。（著者）

秋山清
短歌入門 誰にもできる作歌と鑑賞

二五〇頁
一、五〇〇円（税込）

「わたしたちは自分の現代詩を書くためにも、短歌の古さと伝統的な力を知らねばならない」
詩人　秋山清（一九〇四―一九八八）半世紀ぶりの再刊
装幀　坂井てい

弊社の書籍は一般の書店には並びません。送料無料ですので直接の購入が便利です。定価はすべて税抜価格です。

9784938364397

ISBN978-4-938364-39-7

C9092¥0400E

1929092004002

定価　400 円（税別）

文治堂書店